



会津放射能情報センター NEWS

住 所：〒965-0877 福島県会津若松市西栄町 8-36 Tel & Fax：0242-23-9401
開館日：水木金曜 10 時～16 時 第 1, 3 土曜 10 時～12 時（国民の休日は除く）
E-mail：info@aizu-center.org 公式 blog：http://ameblo.jp/mamorukai-aizu/
Web：https://aizu-center.org



2024 年 9 月 15 日発行

第 46 号

会津放射能情報センター

検 索

たくさんの出会いとお支えに感謝！

会津放射能情報センター代表 片岡輝美

2011 年 7 月、会津放射能情報センターは初めての保養プログラムを兵庫県西宮市の幼稚園をお借りして行いました。福島空港から伊丹空港へ 2 便に分けて約 30 名の親子が移動し、空港で西宮市近隣の教会のみなさんに出迎えていただいた時の安堵感とこれから何年保養をすることになるのだろう…との思いに駆られたことを覚えています。園舎に着いた子ども達は一斉に園庭を走り出しました。でも、砂場で立っているお母さんと 3 歳の男の子がいました。そばに行ってみると、男の子がお母さんに「これは遊んでいいお砂場？」と訊いています。お母さんが「遊んでいいお砂場だよ」と答えると、彼は安心した表情で遊び始めました。

また保養が広がり始めた頃、会津地方のお母さんから「自分の子どもも保養に出したいけど、やっぱり線量の高い地域の子もさんが優先かと思って、今回は参加させないことにしようかと思っています」と、相談がありました。私は「確かに線量が高い地域の子もは保養が必要。でも会津地方だって 3.11 前から比べたら線量が高くなっている。だから、ぜひ保養に出してあげて」と薦めました。その後、その家族は度々保養に出かけていました。

保養プログラムが増え、親子で遠方に出かけて行くようになりました。でも、子どもに楽しかった夏の思い出を作文に書かせないお母さんがいました。保養に参加した我が子が妬みの対象になってしまうことを避けるためでした。

福島にも豊かな自然があるのに、原子力核災害後、どの子も守られなくてはならないはずなのに、親は大きな不安と怒りを抱え、子どもに我慢を強いていたあの時、「保養においで！」と招いていただいたことが、私たちはほんとうに嬉しかったのです。そして、万が一、原発が再び不安定になった時には保養先で出会った人びとの元に避難するようにと幾人かのお母さんたちに伝え、避難先が確保できたと安堵したことも思い出します。

情報センターの活動の柱として測定があります。洗濯された子どものズックからもセシウム 134 とセシウム

137 が検出された時には大きな驚きでした。でも、そこでお母さん達が考えたのは「保養に行く時には新しいズックを履かせよう！」。測定で辛い事実を知るけれど、知恵を出し合って子どもを守ろうとする力強さを見た瞬間でした。何よりも保養に招いてくださるみなさんがいたからこそ、前向きにより良い判断をすることができたのだと思います。

今夏、北海道保養を終了するにあたり、私たち夫婦と小中学生の参加者だった五十嵐まど佳さん（大学 1 年生）と翠星さん（大学 3 年生）はお世話になった浄土真宗本願寺派東林寺（虻田郡俱知安町）の山階ご住職ご一家にご挨拶に行きました。5 年ぶりの再会は山階ご住職のお孫さんおふたりと五十嵐さん兄妹の成長を共に喜び合うひとときとなりました。

千歳栄光教会では感謝報告会を開きました。教会を代表してト部くるみさん（中学 2 年生）が私たちを受け入れてくれた時の思い出を発表し、まど佳さんと翠星さんは保養を振り返り、その出会いがこれからの生き方や学びの大切な道しるべとなったことへの感謝を伝えました。3 名の若い世代の話を聞きながら、「お帰り！」「ただいま！」「大きくなったね！」「また会えたね！」と、再会を喜び合う深い繋がりの中で、彼らが成長してきたことに心が熱くなる思いでした。

私たちは全国の方々に迎えられ、笑顔いっぱいの時間を過ごすことができました。あの時この時が次々とよみがえり、思わず笑みがこぼれます。各地での保養プログラムに携わってくださった全ての方々に心からの感謝をいたします。ほんとうにありがとうございました。そして、この 10 年余りで培われた繋がりを、今後どのように生かしていくことができるかも、期待を持って思い巡らしていきたいと願っています。



▲ 千歳栄光教会で開催された保養感謝報告会

特集!! 保養感謝報告会

2024年8月13日(火)千歳栄光教会を会場に北海道保養感謝報告会を開催しました。片岡輝美代表は福島の実況報告を行い、若者三名がそれぞれの立場から保養の感想や感謝を伝えました。ここに再録します。

■保養プログラムを振り返って ト部くるみ(うらべくるみ中学2年生)

私は2016年～2019年の4回の保養プログラムの中で感じたことなどをまとめました。

みんなで行った場所は鮭のふるさと館、細田牧場、青少年科学館、札幌ピリカコタンなどを訪ねました。鮭のふるさと館ではたくさん魚をみたり、エサやりなどをしたのを覚えています。青少年科学館に行った時は、プラネタリウムを観たりして、私はプラネタリウムですっと寝てしまいました。宇宙食を買って食べていた人をよく覚えています。

札幌ピリカコタンではアイヌ文様を描いたり、チセを見たりして、その時は少し怖いと感じましたが、いま思うとアイヌについて知る機会があまり多いわけではないので行ってよかったと思います。

保養プログラムで仲良くなった友達としばらく会うことができなかったのですが、友達から手紙が来て、覚えていてくれているんだと思い、とても嬉しかったです。いつも一緒にいられるわけではなく、その時しか会うことができない友達だったので、毎年保養プログラムを楽しみにしていました。

以前は、保養にくる友達はただ遊びに来ていたと思っていました。今、あらためて保養について調べ

てみると、保養とは事故の後で身体を休めたり、怖い気持ちや不安な気持ちを少しでもなくして落ち着いて過ごすためということがわかりました。帰ってからも安心して過ごしてもらうため、この保養の時間が大切だと思いました。

私にとってもこの保養プログラムは貴重な時間であり、この出会いが与えられたことを感謝しています。保養プログラムは終わってしまいましたが、これからも福島の友達のことを忘れずにいたいと思いますし、手紙も書きます。

■思い出は心をポカポカにする 五十嵐まど佳(いがらしまどか大学1年生)

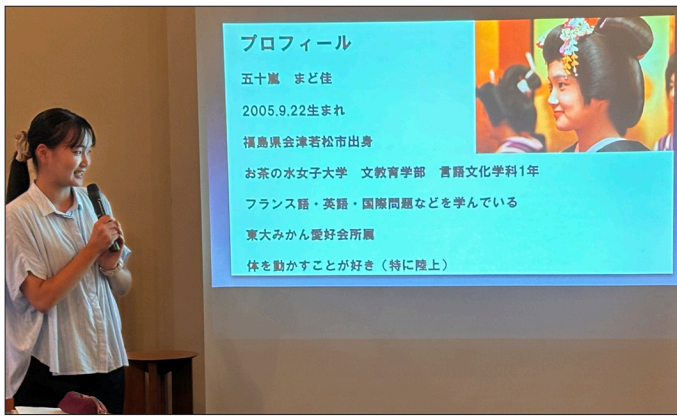
私が北海道保養に参加したのは、全部で4回です。当時小中学生だった自分が、約一週間も家を離れて北海道に泊まっていたと考えると、すごいことだなと思います。

搾りたての牛乳を飲んだり、とれたてのとうもろこしを食べたり、バギーに乗ったりと、さまざまな思い出があります。そして、これらの北海道保養の記憶とともに心に浮かぶのが、私たちを迎えてくださった方々のあたたかさです。人のあたたかさを知った場所、人のあたたかさに触れた場所が保養でした。

また、辛かった高校時代…。楽しかった頃に帰りたと思った時に最初に浮かんできたのも、保養でした。保養で北海道に行った時のことを思い出すと、心がポカポカしてきます。それくらい、私にとって皆さんと過ごした保養の時間というのはとても大切なものでした。今回は5年ぶりの訪問でありましたが、以前と変わらず迎えてくださって嬉しかったです。

保養に参加していた当時は、ただの旅行気分でした。どうして連れて行ってもらえるのか、どうしてチケットが用意されているのか、震災関係なのだろうとなんとも理解しているだけでした。しかし、保養の報告会をするにあたり、感想文を読み返していたところ、震災のことで周りの大人がどれだけ私たちのことを気遣ってくださっていたのかに気づくことができました。また、周りにいた大人だけでなく、顔も合わせたことのない全国の方々の支援により私たちが保養に参加できていると気づきました。





そのような方々と、保養を通して繋がれたことも嬉しく思います。

私が保養を通して感じたこと、そのひとつは上にも書いたように人のあたたかさです。そしてもうひとつが『つながり』でした。保養が終わってしまうことは残念ですが、このまま終わらず感謝報告会とかたちで再会できてよかったと思っています。

大学生になって、色々な人の名前や千歳駅から千歳栄光教会までの道など、小中学生の時よりもたくさんのことを覚えて帰ってきました。自分で北海道まで行くこともできます。保養は終わりでも、途絶えていたかもしれない私たちのつながりを、再構築することができました。ゴールではなく「再スタートだ」と私は思っています。再会できて本当に良かったです。

最後になりますが、原子力行政を問い直す宗教者の会の皆様、千歳栄光教会の皆様、東林寺の皆様をはじめ、心を寄せてくださった全ての方々へ、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

■報告の要約「大学で原発を学ぶ」 五十嵐 翠星（いがらしすいせい大学3年生）

私は、『週刊・福島復興知学講義』という授業を大学2年生の春学期に受けました。今回、千歳栄光教会でその授業の内容とそれに関連するフィールドワークの様子を報告しました。

第一部では「『週刊・福島復興知学講義』という授業を受けて」と題して、授業の内容を紹介しました。この授業は、全国の大学関係者が復興活動を行うなかで得られた智恵や知識を「復興知学」と定義し、工学や物理学、災害研究の視点から復興について考えることを目的としています。私は福島県出身ということや保養に参加してきた過去から、原発に

ついて学ばなければならないと考え、この授業を受けることにしました。

実際は専門性が高く科学的な話が多くて、文系の自分にとっては難しい内容でわからなかったです。また、原発事故を身近に見た私はなぜ原発事故が起きたのか、原発事故はどのようなものだったのかという問いに対する答えを授業に求めていました。一方で、授業は「復興」を中心に上げ、より良い未来を目指す未来志向的であり、過去の振り返りをしていませんでした。この点に、私は自分の立場と講師の方々の立場に違いがあると感じました。

次の第二部では「福島復興知学フィールドワーク」の様子を紹介しました。フィールドワークでは、2023年8月7日～9日の2泊3日で、福島県の飯舘村や大熊町、双葉町、富岡町を巡りました。1日目は飯舘村で農業や畜産を営み暮らしている方々の様子をうかがい話を聞きました。2日目は東京電力福島第一原子力発電所と中間貯蔵施設を見学するツアーに参加しました。東京電力福島第一原子力発電所ツアーでは、専用バスに乗り廃炉作業が行われる発電所構内を回りました。一方で、服装は私服のまま撮影は禁止され、内部被曝の様子を避けるため飲食も禁止でした。驚いたのは、原子力建屋の80m手前でバスを降りるように言われ、車外に出たことです。そこで壊れた建屋を目の前にしましたが、私は何も感情が湧かず、不思議な気持ちになっていました。建屋内部は放射線量が高すぎて人体に危険とのことでした。

次の中間貯蔵施設ツアーでは、大熊町にある中間貯蔵施設を見学しました。山林を切り開いて作られているので除染されておらず、いまだ線量が高いとのことでした。3日目は楡葉町ミュージアム「大地



とまちのタイムライン」や東日本大震災・原子力災害「伝承館」を訪れました。

最後に、この授業・フィールドワークを通して私自身が学んだことをお伝えしました。それは、今の福島の復興には歴史の視点がないということです。復興を通してより良い福島の未来を実現することも必要ですが、同時に過去の振り返りもするべきです。事故前の住民の生活を取り戻すためには、ロボット開発や農業のICT化が本当に必要なのでしょうか。また、国や電力会社は、原発事故という人間の過ちを十分に振り返っていないように見えます。

こうした現状を踏まえて、今の復興が過去の過ちをちゃんと清算しているのかについて、過去を見つめる歴史学の視点から考えることが重要だと訴えました。



▲ 保養感謝報告会では会場の参加者との熱いやりとりも

ラムだったのか、もっともっとおとなになったときに彼らから聞いてみたいですね。

思い起せば、2016年の8月、教会で宿泊する保養プログラムが始まりました。当時、年長児だったくるとは約1か月前に「お泊り保育」を不安の中で経験したばかりでした。そのくーちゃんが子どもたちの輪の中に入り、迷わずお泊りの準備をしていたことに親として驚きました。幼稚園の子どもが確実に受け入れる側のひとりになっていると感じました。

そのト部くるみも中学2年生になりました。出会ったときは、5歳と2歳だったと思います。保養で出会った、廣野笑理さんとの「つながり」をこれからも大切にしてほしいと思います。

「保養」を辞書で調べると、意味がもうひとつありました。それは「心をなぐさめて楽しむこと」です。本当に楽しかったです。ありがとうございました。表面的にはわたしも受け入れる側のひとりですが、確実にわたし自身が情報センターの方々に受け入れられていました。

「保養が始まらないと、夏が始まらない」、毎年そんな思いでした。会津の方々を迎える夏のプログラムは、わたしにとっては「心の保養」でした。



▲ こんなに大きくなりました！千歳栄光教会の皆さんと一緒に

■「心の保養」ト部 康之（うらべやすゆき千歳栄光教会）

「保養」という言葉を辞書で調べると「からだを休ませて健康を養うこと。養生すること」とあります。

北海道というところで、様々な人に出会い、のんびりして遊び、安心できる食べ物を食べた日々。参加した子どもたちにとって、どのような保養プログ

北海教区の皆さんが来館してくれました！

8月23日、北海教区東日本大震災支援委員会の4名と東北教区放射能問題支援対策室いすみの4名の皆さんが来館。同委員会主催の北海道保養が終了するにあたり、今後の繋がりを模索するために現地の声を聞きにセンターに来てくださいました。また同日午後には、郡山教会で保養参加者の同窓会「北海道がやって来た！」も開かれ、会津放射能情報センター会員も出席。嬉しい再会の時でした。



Photo Album 2013 年～ 2019 年

一番上の行が 2013 年の保養プログラム。下に向かって 2019 年まで毎年開催しました。懐かしいね～。お世話になった皆さん、ありがとうございます。



「原発作業員を追い続けて 福島と能登半島地震から見えること」

報告：会津放射能情報センター 片岡輝美

8月9日から11日まで会津若松市文化センターにて開催された「2024 平和まつり」で、会津放射能情報センターは学習会を企画し、講師に東京新聞・片山夏子記者をお迎えした。福島県内で初めてのご講演とのことで、中通りや県外からも参加者が駆けつけ、52人がお話を聴き入った。講演のテーマはふたつ。一つ目は今年元旦に起きた能登半島地震の取材報告であった。

地震と原発事故 果たして避難できるのか？

東京電力福島第一原発事故後、国は30キロ圏内の自治体に避難計画の策定を義務づけ、避難先の施設や避難ルート、移動手段などの設定をするように定めた。石川県では志賀原発から30キロ圏内の自治体は4市4町。輪島市と七尾市、穴水町、志賀町の原発北側の住民は能登半島の先端方向へ、南側は金沢方面に避難を想定している。そこで2月下旬、片山記者は北陸電力志賀原発が稼働中で事故を起こした場合、果たして避難計画は機能したのかどうかを検証するため避難経路を全て走った。

地震発生2ヶ月後でも北へ向かう、つまり震源地であった珠洲市に向かっていくほど大きな陥没や30センチ以上の段差、土砂崩れや岩の崩落など道路状況は悪化。何力所も通行止めがあり、住民は「避難経路が多数寸断され避難はできなかった」と証言。国は住民の自家用車避難を想定しているが、悪路や倒壊した家屋の下敷きになった車もあり、とても自力での避難は不可能であることが明らかになった。

県は船やバスでの避難も計画しているが、今回漁港69ヶ所のうち60ヶ所が被災。海底の隆起で半島北岸全域が壊滅的な被害を受け、さらに漁業者も被災したため救助の船が港に向かってても接岸することは不可能だった。県漁連幹部は「津波の到達が早く、船すら守れなかった。原発事故時、船が出せるか分からない」と言ってい



る。またバス会社は「自分たちは民間企業なので、放射能が問題になっている場所には行けない」と回答。悪天候ではヘリも救助には行けない。

さらに避難計画では被ばくを避けるために屋内に避難するとしているが、無数の家屋が倒壊した現地を見れば、それも全く机上の空論でしかない。石川県は「避難計画の作り直し」を検討しているが、「どのように作り直しても、避難はできないのではないか」と、片山記者は疑問を呈する。

1976年頃、関西、北陸、中国電力が珠洲原発の建設を計画し、住民は賛成派と反対派に激しく分断されながら、建設中止を実現させた。能登半島地震後、反対運動の中心人物であった塚本真如住職の元には珠洲原発建設を阻止してくれたことへの感謝の電話が続いている。塚本住職は、反対運動が成功した理由は自治体に土地を買収させなかったことにある、つまり複数の反対者名義による共有地を作り「私が倒れたら、次はあなたがよろしく」と住民皆で責任を担ったことが大きな力になったと話している。

片山記者は現地を取材した後、今年3月11日東京新聞1面に「避難計画は崩壊した」と発表。地震が起きた時には救助が困難を極めることを踏まえ、全ての原発の稼働停止を最優先に選択すべきだと結んだ。

原発作業員に何が起きているのか？

二つ目のテーマは原発作業員を追い続けて見えてきたこと。片山記者は2011年8月から原発作業員の日常や家族への思いを、東京新聞に「ふくしま原発作業員日誌」として連載している。そこに綴られる作業員の言葉は「原発事故が起きたら人に何が起きるか」をストレートに私たちに伝える。

更に今回、片山記者から作業員の生の声や思いを伺い、作業員が立ち向かっている相手がより鮮明になった。それは放射能被ばく線量、猛暑、そして人として扱われているかどうかということ。

内部被ばくを防ぐための防護服は重装備だ。全面マスクはきつく締めすぎると激しい頭痛を感じるし、緩ければ隙間から放射性物質が入り内部被ばくの恐れが生じる。この暑さでマスク内は熱がこもり、汗で水滴がつきポタポタ落ちてくる。目に汗が入ると染みてとても痛い。そんなときは下を向いて瞬きをして汗を落とす。それでも暑さと息苦しさに堪えられなくなると、マスクを少しだけ開けて汗を流し出す。防護服は風を通さないから下着まで汗でビチャビチャになる。手袋は薄い手袋の上にゴム手袋を4、5枚重ね、汚染したら1枚ずつ脱いでいく。しかしこの重装備でも防げるのは放射性物質の付着だけ。放射線は防護服を貫通し被ばくは免れない。

そこで作業員の安全確保のために重要になるのが積

算被ばく線量だ。通常時、国は作業員の被ばく線量上限を「1年で50mSV」「5年で100mSV」と定めている。よって1年目の被ばく線量が高ければ、次の年はその分「枠」が減り、上限を超えた作業員は現場を離れなければならない。しかし事故が起き、作業員は猛烈に高い空間線量の中で作業することになった。片山記者は「初期被ばく線量は記録されていない。記録がないことは議論されない。つまり将来発病したとしても証拠がなく、被ばくが原因とは認められない可能性がある、ということになる」と語った。

国は原発事故の緊急作業の被ばく線量限度を累積250mSVに引き上げたものの、上限を超えた作業員は原発での仕事を続けられなくなり、これは作業員を派遣する企業の存続にも関わってきた。そこで行われたのが「被ばく隠し」。記録上の被ばく線量を低く見せるために、作業時に身に着ける線量計を「鉛カバーで覆うように」上司が作業員に指示を出したことを2012年7月、朝日新聞が報じた。片山記者の取材によって、強要はなかったものの企業も作業員も仕事を失うことを恐れて行ったことが分かった。

8月19日夜、NHK番組「100カメ」は福島第一原発

内を放送。そこに映し出された明るく元気でプライドを持って作業する作業員の姿もひとつの事実には違いない。しかし、被ばくを避けるため遠隔操作で行うべき作業にトラブルが発生すれば、結局人海戦術となるような、高線量の建屋内で作業をする空間を作るために鉛板をリレー式で運び込むような環境を作った責任者

は作業員の尊厳を守っているのか。自分が「高線量要員」だと知った時の衝撃や「おれがやらなきゃ…」と鼓舞する作業員の気持ちを私たちは知っていたのか。片山記者は最後を「原発事故で人に何が起きたのか、起きているのかを知ってほしい」との言葉で結んだ。

片山記者の『ふくしま原発作業員日誌 イチエフの真実、9年間の記録』をぜひ読んでいただきたい。そこには作業員と家族の9年間の人間物語が綴られている。



各地でセンター活動を紹介しました

■6月26日、桜美林大学（神奈川県）の講座「宗教と倫理（佐原光児さん担当）」で60名の大学生に原発核災害による福島の現状と、原発回帰を目指す政府に対する思いを伝えました。学生からは避難先での出来事や緊急時の対応、六ヶ所再処理工場の危険性、原子力に代わる電源など多岐にわたる的確な質問がありました。当初はZoomでのリモート講義の予定でしたが、対面を希望し実現しました。



■8月14日、北海道・旭川豊岡教会で開かれた「旭川8.15平和祈禱会」で福島の現状やセンターの働きをお話し、放射能汚染水の海洋放出問題と1年目を迎える海洋投棄の中止を求める「グローバルアクション」を紹介。早速、千歳栄光教会と旭川三教会合同オンライン礼拝から「いのちの海を守りたい」とのステキな画像が届きました！



10月26日(土)は 会津放射能情報センター総会 と 水戸喜世子さんのお話し会です

■第14回 会津放射能情報センター総会
10:30 ~ 12:00

センターの第13期を振り返り第14期の活動について協議します。Zoom参加は申し込みが必要です。

■水戸喜世子さん お話し会
『人生に乾杯！私の市民運動論』
13:30 ~ 16:00



入場無料 会場カンパ歓迎 ライブ配信↑

暮らしの中からの市民運動、科学者として今の時代をどのように洞察しているのか…など多岐にわたるお話を伺います。オンライン配信もありますが、ぜひ会場に来て水戸さんの言葉を直接受けとめてください。ご参加をお待ちしています。

■会場は いずれも 若松栄町教会礼拝堂
詳細は情報センターのホームページで

■ 2024 年 5 月～ 8 月の活動報告 ■

■ 5 月

- 10 日 センター役員会
- 19 日 子ども脱被ばく裁判決起集会 90 名 東京
- 20 日 子ども脱被ばく裁判第 1 回最高裁要請行動 50 名
面談 17 名 東京
- 23 日 報告：CGMB ユースプログラム 11 名
アジア学院 片岡輝美
- 26 日 講演会「教育への政治介入問題～福島県自民党
意見書から考える」70 名 郡山

■ 6 月

- 13 日 汚染水海洋放出差止訴訟第 2 回口頭弁論期日
- 14 日 山崎知行医師 訪問 1 名
- 15 日 山崎知行医師 相談 1 名
元自主避難者おしゃべり会 5 名 子ども 2 名
- 17 日 最高裁共同行動「原発事故は国の責任！
6.17 判決を正す！」1,000 人
- 23 日 報告：イチモクの会 6 名 片岡輝美
- 26 日 報告：桜美林大学 60 名 片岡輝美

■ 7 月

- 8 日 ひだんれん交渉 福島県避難地域復興課、避難
者支援課、生活拠点課、原子力損害対策課
- 9 日 「ALPS 処理汚染水」と廃炉等についての国・東
電と住民との説明意見交換会 83 名
- 11 日 ひだんれん交渉 福島県原子力安全対策課
- 15 日 海の日アクション いわき市立
三崎公園野外音楽堂 100 名
- 17 日 東電刑事訴訟最高裁要請行動 80 名
- 29 日 子ども脱被ばく裁判第 2 回最高裁要請行動

■ 8 月

- 11 日 平和まつり 2024 東京新聞・片山夏子記者
講演会 52 名
- 13 日 北海道保養感謝報告会 28 名 千歳栄光教会
五十嵐翠星、まど佳、片岡輝美、舘也
- 14 日 報告：2024 年旭川 8.15 平和祈禱会 22 名
旭川豊岡教会 片岡輝美
- 23 日 来館：北海教区から 4 名 放射能問題支援対策
室いずみから 4 名
- 24 日 ALPS 処理汚染水海洋放出強行 1 年
8.24 共同抗議行動 51 名 七日町市民広場
「これ海グローバルスタンディング 2024」
- 27 日 報告：全国教会婦人会連合「原発といのちを考え
る」第 1 回学習会 19 名 片岡輝美
- 30 日 センター役員会

■ 2024 年 4 月～ 8 月の感謝報告 ■

年会費および協賛金をお届けくださった方を記載して
います。感謝申し上げます。特記なき教会や教区は、「日
本基督教団」です。記載漏れなどがありましたら、ご連
絡ください。4 月 1 日～ 8 月 31 日の受付分となります。
(敬称略・到着順)

■ 個人

石川雅子、西尾登美、澤田 修、山崎知行、泉谷五十鈴、
高橋雅子、遠藤浩二、市川真紀、小林由美子、小坂橋秀見、
木村啓子、我孫子発代、沖田忠子、佐々木君江、戸枝正輝、
博田章雄、下川 潤、片岡公子、最上光宏、最上久美子、
中林正剛、中林ひかり、小林 休、佐久間 愛、岩高 澄、
行本宏子、木村はるみ、木村愛美、中川宗洋、中川葉子、
武田総一郎、水戸喜世子、右近史江、小林 明、渡部政子、
前川圭子、松田光代、北垣成子、赤城敬子、松木弥栄子、
小野洋子、藤原秀徳、三浦忠雄、小西二巳夫、小西文江、
藤條淳子、後藤由美子、渡部明江、寺島順子、横山幹央、
谷岡賢一、佐久間美千子、小林順子、成松三千子、北村
芳子、稲垣悦子、依光えり、内藤新吾、佐原光児、大竹
隆、小幡 正、小寺秀一、小出敏市、斉加尚代、西村雅
代、宮本真希子、吉高 叶、吉高 路、伊藤三和、守下
宣子、大城江利子、五十嵐こす恵、牧内昇平、石川嗣郎、
横山義弘、横山恵子、田中絹子

■ 団体

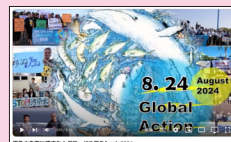
下落合教会、東洋英和 福島の子ども支援プロジェクト
虹の橋募金、日本福音ルーテル大垣教会 婦人会、千里
聖愛教会、防府教会、藤沢大庭教会、佐和子となかまたち、
市川三本松教会、伊丹教会 日曜学校、水口教会、ぶど
うの木保育園、鎌倉恩寵教会、二宮教会、日本福音ルー
テル稔台教会、長岡京教会、箕面教会、甲府 YWCA、花
巻教会 婦人会、六角橋教会、大宮まぶね保育園、千歳
栄光教会、北海教区旭川伝道圏委員会、放射能問題支援
対策室いずみ、北海教区東日本大震災支援委員会、日本
キリスト教婦人矯風会徳島、中野桃園教会、日本キリス
ト教婦人矯風会四国部会

■ 支援品

佐和子となかまたち、島松伝道所、千歳栄光教会

汚染水を海に流すな！ グローバルアクション 2024

YouTube 動画はこ
ちらからどうぞ！
右の QR コードを
ご利用ください。



■ ホームページをご覧ください ■

センターや関連団体からの情報、ML で代表が発信する「原発核事故関連情報」、ホットスポット・ファインダー
で測定した「放射能測定地図」等を掲載しています。センター NEWS のバックナンバーもご覧いただけます。

■ ML (メーリングリスト) に登録を ■

「原発核事故関連情報」やセンター主催の学習会、催し物の案内などを一斉配信しています。登録を希望される
方は、件名に「ML 登録希望」、本文に氏名を記入して info@aizu-center.org 宛にメール送信してください。

■ センター会員募集と年会費納入のお願い ■

年会費や協賛金のお振り込みはこちらにお願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行 記号：02270-2 口座名：会津放射能情報センター 番号：116030